

II・源氏物語香図引歌と場面絵・趣意絵

* ◇内の数字は資料番号

『源氏物語』関連の庶民資料の代表的なものに、源氏物語香図引歌(源氏五十四帖引歌香図)などと呼ばれるものがあります。それらは、『源氏物語』の各巻について、「引歌」といわれる代表的な場面や巻名にちなむ和歌を一首ずつ取り出して記し、それに関連する絵を添え、源氏香文様を付したものです。ただし、『小松百人一首小倉文庫』⁴⁰のように、引歌と源氏香文様のみで絵のないものもまれにあります。

源氏香文様は、香道の源氏香と呼ばれる組香に基づく文様です。源氏香は、五種の香料をそれぞれ五包ずつ、合わせて二五包を用意し、その中から任意に五包を取り出して順次焚き、その香料名をかき当てる遊戯です。源氏香の香料の組合せは、五二通りになります。源氏香文様と呼ばれるのは、香料の組合せを五本の棒をつなぎ合わせた形の文様で示し、桐壺と夢浮橋の両巻を除く、『源氏物語』の巻名に当てはめたものだからです。源氏香文様を描いた源氏香図が成立したのは、近世中期の享保年間(一七一六～三五)以前と推定されています。ところが、時期が下がって源氏香文様の由来が不明確になると、桐壺と夢浮橋の両巻に文様がないのを不審に思っ、あえて文様を書き加えたものが多く見られるようになります。

源氏物語香図引歌に添えられた絵の図様は、場面絵と趣意絵と二つに大別されます。場面絵は、物語の場面を具体的に描いたものです。桐壺巻について見ると、桐壺帝と誕生したばかりの光源氏が対面している図(『秀玉百人一首小倉葉』¹⁵、『源氏物語絵尽』¹⁶、『源氏物語絵尽大意抄(源氏物語絵抄)』¹⁷、『源氏百人一首』¹⁸、『女訓百人一首教鑑』²¹)、高麗の相人が光源氏の観相をしている図(『群花百人一首和歌蘭』¹⁹、『女教小倉色紙』²⁰、『美玉百人一首』²²)。以下は絵のみ、『女万歳宝文庫』²³、『女文選料紙箱』²⁴、『倭百人一首玉柏』²⁵、光源氏の元服の折の図(絵のみ『女遊学操鑑』²⁶、『女大学宝箱』²⁷)の三つに本によつて分かれています。この中で目立つのは、高麗の相人が観相する場所が、鴻臚館ではなく、桐壺殿舎で帝に謁見している絵柄になっているものが多いことです。場面絵の絵柄はそれぞれに特徴が見られますが、冊子風の表紙絵として描かれているようなものもあります(『女教小倉色紙』²⁰)。

趣意絵は、巻名や巻の内容にちなむ図様の絵が添えられているもので、たとえば桐壺巻ならば、桐の木や枝、桐壺の殿舎などが描かれています(『百人一首女訓抄』²⁸、『源氏百人一首』²⁹、『百人一首(仮称)』³⁰、『女万葉若緑』³²、『女訓宝文庫』³³、『今様百人一首吾妻錦』³⁵、『女要文章宝鑑』³⁶、『万宝百人一首小倉錦』³⁷、『百人一首吾妻錦』³⁸など)。中には、色刷のもの(『春玉百人一首姬文庫』³¹)、精緻な情景描写のもの(『倭百人一首小倉錦』³⁹)、「源氏香図」が白抜きになっているもの(『司百人蜀江錦』³⁴)などもあります。

(東京学芸大学名誉教授 小町谷照彦)資料から見た

源氏物語

双六・往来物を中心に